
胡蝶泉

きりもんじ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胡蝶泉

【Nコード】

N8394D

【作者名】

きりもんじ

【あらすじ】

（戯曲）中国雲南省の山奥に胡蝶泉という泉がある。その昔蒙古に追われた姫と若者が身を投げた。その時幾万の蝶が舞い上がったという。そして今、文革の嵐の中で……。 （きりもんじ）

第一場 泉のほとり（前書き）

この作品は戯曲のつもりで書いておりますので読みずらいでしょうがよろしくお願いいたします。

第一場 泉のほとり

夕暮れ時である泉のほとり。中国の山村。
遠くに雪を冠した山脈が見える。

仙人を真ん中に上手に赤いスカーフをまいた
女の子と下手に男の子が座っている。

（女の子）「おじいちゃん今日のお話は何なの？」

仙人ゆつくりと立ち上がり、

（仙人）「今日はな、この泉の物語じゃ。この泉は
不思議な泉でな、あの高い山なみからの地下の水脈
とつながって、絶対に潜ってはいかんと昔から
言われておるのじゃ」

男の子立ち上がる。

（男の子）「でも潜った人はいるんでしょう？」

（仙人）「ああ何人かはな。わしの知る限りでは
数年前に二人が飛び込んだということを聞いた」

（男女の子）「ほんと？」

（仙人）「その昔にも飛び込んだものは結構
おるかも知れんな」

（男の子）「この紅衛兵の時代になって、そんな
ことは絶対ないと思う」

（女の子）「どうして飛び込んだじゃったのかしら？」

（仙人）「それはいろんなことがあるのさ。時代が変わり

人の心が変わったように見えても、昔からちつとも変わらんものもあるのじゃ。あの大空やあの山々の峰のようにな」

（女の子）「その人たち死んじやったの？」

（仙人）「それがな、不思議な泉のことじやて、死んだかどうかよう分からのじゃ」

（男の子）「飛び込んだら死んだに決まっている」

（仙人）「そうだ。飛び込んだら最期、どこかの地下水脈の流れに飲み込まれてしもうて、もう助からんじやろう」

（女の子）「けどどうして飛び込んだのかしら？」

（仙人）「誰も飛び込もうと思つて飛び込んだわけじゃあない。何かの事情で飛び込まざるを得なかつたと思うんじや」

（女の子）「死ぬと分かつて？死体が上がらないと分かつて？」

（仙人）「だからこそじゃ。そう、そこに書いてあるな」

仙人立て札の所にいき指差して、

（仙人）「飛び込むなかれ底なしの泉なり。地下水脈にて死体は二度と上がらない……だからこそじゃ」

（男の子）「大昔から書いてあつたのかな？」

（仙人）「そう、大昔から書いてあつた」

（男の子）「それでも、この紅衛兵の時代になつて飛び込んだものがあるなんて信じられない！」

（仙人）「ところが数年前に二人飛び込んだ」

（女の子）「どうして飛び込んだのかなあ？」

（仙人）「さらにこの不思議な泉には」

（男女の子）「さらにこの不思議な泉には」

（仙人）「飛び込むと同時に幾万もの蝶が天空に舞い上がる」

（女の子）「ほんとう？」

（男の子）「うそだ！この紅衛兵の時代にそういう事は絶対にない」

（仙人）「ところが本当なんじゃ。数年前の春本当に幾万の蝶が舞い上がったんじゃ。多くの村人がそれを見ている」

（男の子）「俺は知らない」

（女の子）「私も知らない」

（仙人）「あまりの悲劇のために誰も多くを語ろうとしない。恐らくその時、紅衛兵に追われた若いふたりがこの泉に身を投げたのじゃろうといわれている」

―暗転―

第一場 泉のほとり（後書き）

つづく

第二場 大理国（前書き）

この作品は戯曲のつもりで書いておりますので読み辛いでしょうが
よろしく願います。

第二場 大理国

闇の中で仙人の声が響く。

(仙人)「今は昔、この地に大理国という国が栄えておった」

スポットが当たり下手から若者登場。

(若者)「早く国王に知らさねば、蒙古の軍がそこまで来ている」

若者、上手に退場。スポットが当たり下手から国王、王女、
姫が登場。城の中。遠くに山なみが見える。

(国王)「蒙古の軍はもうそこまで来ておる」

国王、いらいらとうつろつく。

徐々に明るくなる。

(王女)「姫は南へとお逃げなさい。私は王と共に戦います」

(姫)「お母様！」

(王女)「あなたの事はよく分かっています。村の若者が着いたら
ふたりですぐにお逃げなさい」

(姫)「お母様！」

(王女)「ふたりの仲の事は母である私が一番よく分かっています。
王子の北の城が落ちたらすぐさま知らせに来るようにと、
あの若者に頼んでおきました」

(姫)「お母様！」

姫、王女に泣き崩れる。

下手より若者現れる。

走りつかれて倒れそうである。

（若者）「申し上げます。蒙古軍は総攻撃をかけてきました。王子様の守りは撃破され総崩れになってこの城へ撤退中です」

（国王）「王子は？」

（若者）「王子はご無事です。攻め来る敵と戦いながらこの城へ向かっておられます」

（国王）「蒙古は皆殺しの民と聞く」

（王女）「姫！直ちにお逃げなさい！この若者とともに南の地へ！」

若者と姫、互いに見詰め合う。

（国王）「ええい！早く行け！」

（王女）「早く行きなさい。この城は王子とともに最後の最後まで戦い抜きます。あなたの使命は生き延びてわが一族の子孫を残すことです。早く行きなさい」

（姫）「分かりましたお母様」

若者と姫、上手に去る。

下手より戦いつかれた王子現れる。

剣は抜いたまま大きく息をしている。

（国王）「大息子よ」

（王女）「王子……」

王女、王子の下に駆け寄る。

王子、大きく息をつきながら、

「父上、もはやこれまで。蒙古の軍は十万を越える大軍で、

わずか数千の大理国が滅びるのは時間の問題だ。姫を、早く姫を逃がしてやってくれ」

（王女）「もう姫は逃げました。あの若者とふたりで」（王子）「そうか、それは良かった。なんとしてでも生き延びてくれ……」

王子はここで息絶える。

背中に大きな矢が刺さっている。

国王、王女「王子！」

ふたり駆け寄り王子の体を支え抱く。

―暗転―

第二場 大理国（後書き）

つづく

第三場 文化大革命（前書き）

この作品は戯曲のつもりで書きましたので読みにくいでしょうがよろしく願います。

第三場 文化大革命

仙人を真ん中に左右に男の子と女の子が座っている。
仙人にスポットが当たる。

（仙人）「それはすさまじい殺戮じゃった。蒙古軍の去った後には生きとし生けるものは何一つ見あたらなかった」

（女の子）「姫と若者は生き延びたの？」

（仙人）「さあ……どうだか」

（男の子）「いま、紅衛兵の時代にはもうその様な無益な戦いは終了した」

（仙人）「さあ……どうだかな？」

―暗転―

（仙人）「つい最近のことじゃが、文化大革命というのが起きた。南の広西チワン族自治区でそれは極限に達した」

―明転―

中央に『貧下中農最高法廷』と書かれた横断幕。

何本かの紅旗が翻る。上手に軍幹部がいて横にジャーナリスト。

ふたりの男女が引き出されている。

中央に女幹部が立って演説をしている。

周りを紅衛兵と民兵が取り囲んでいる。

（女幹部）「二人は極秘会議を開き共産党打倒を謀議した」

（男）「うそだ！」

（女幹部）「嘘なものか。お前は精華大学のエリートではないか」

（男）「確かに技術者ではあるが人民の敵ではない！」

（女幹部）「ええいだまれ！この女も大学出の人民の敵だ。

ふたりに密会している所を目撃されているのだぞ」

（女）「私達は人民の敵ではありません！」

（女幹部）「お高くとまってんじゃないよ人民の敵！

皆どう思う？生かすべきか、殺すべきか？」

（民兵たち）「殺せ！人民の敵！共産党万歳！」

稲妻が走り雷鳴が轟く。

―暗転―

スポットが軍幹部とジャーナリストに当たる。

（ジャーナリスト）「人間をこんなにやたらに殺してよいのですか？」

（軍幹部）「これは大衆闘争ではないか。プロレタリア独裁というのは

民衆の専制である。軍もこれには手出しができない」

―暗転―

稲妻が光り雷鳴が轟く。

闇の中で民兵の声が響く。

（民兵たち）「二人が逃げたぞ！探せ探せ！」

第三場 文化大革命（後書き）

つづく

第三場 逃避行（前書き）

この作品は戯曲のつもりで書きました。読みにくいでしょうがよろしく願います。

第三場 逃避行

闇の中で声が響く。

（女の子）「うまく逃げ延びて欲しいわ」

（仙人）「うまく逃げ延びて欲しいな」

（男の子）「何を言ってる。二人は反動右派分子だ。人民の敵だ。早く掴まえて処刑しなければ、我々人民が逆に殺されてしまう」

（仙人）「もうそういう時代は終わったのだ」

（女の子）「そうよそうよ。ふたりに何とか逃げ延びて欲しいわ」

暗闇の中スポットが当たり、上手より

若者と姫が逃げながら下手に消える。

スポットが当たり下手よりエリート

二人が逃げながら上手に消える。

明転―若者と姫が上手より現れ泉の前で立ち止まる。

（若者）「ここまでくればもう大丈夫だろう」

若者、姫の手を取り泉を覗き込む。

（姫）「まあ、とてもきれいな泉なこと」

姫、水辺に降りて手で泉の水をすくう。

（姫）「ねえ、見てみて。とても清らかで美しいわ」

姫、ひと飲みする。

(姫)「とてもおいしい!」

若者は向こうを見こちらを見、見張っている。

(姫)「あなたも飲んでみて、とても冷たくて美味しいわ」

(若者)「・・・ああ」

若者、水辺に降りていく。水をすくいごとりと一飲み。

(若者)「ああ、とても美味しい。水面が透き通っていて吸い込まれそうだ」

ふたり、目を合わせて微笑む。

(若者)「何か書いてあるぞ」

ふたり、立て札を見つめる。

(若者)「飛び込むなかれ、底なしの泉なり。」

地下水脈にて死体は二度と上がらない。・・・か。
ふーむ、とても古い字だな、これは」

(姫)「底なしの泉なの?」

(若者)「ああ、底なしの泉だ」

遠くで蒙古兵の声。

(兵1)「足跡があるぞー、こつちだ!」

姫と若者、泉の脇に隠れる。

上手より蒙古兵三人が現れる。

(兵2)「こんな所に泉があるぞ?」

(兵3)「飲めそうか?」

(兵2)「飲めそうだ」

蒙古兵１は盛んに付近を捜している。
他のふたりは水を飲んでいる。
姫と若者は身をよじらせながら
泉の裏側へ回ろうとしている。

（兵１）「あつ、みつけたぞーっ！」

兵２、３身構える。

にじり寄る３人の兵。

姫と若者、泉の裏手に後ずさりする。

（若者）「用意はいいか？姫！」

（姫）「もちろんですとも！」

（若者）「それっ！」

ふたり、瞬時に泉へ飛び込む。

（兵３）「あつ、飛び込んだ」

兵２、飛び込もうとする。

（兵１）「待て！再び浮上してきた所を掴まえばよい。
ここで待て、必ず浮き上がってくる」

兵３人、武器を構えて待つ。

突然、おどろおどろしい雷の音。

― 暗転 ―

稲妻が光り雷鳴が轟く。

兵３人ひれ伏す。

大きな蝶が二匹羽ばたいて泉から

飛び出で上手に消えていく。

その後を無数の蝶が天空を舞い上手へと消えていく。

第三場 逃避行（後書き）

つづく

第四場 胡蝶泉（前書き）

この作品は戯曲のつもりで書きました。読みにくいでしょうがよろしく願います。

第四場 胡蝶泉

中央に仙人、両脇に男の子と女の子。

（女の子）「二人とも蝶になったのね」

（仙人）「ああ、蝶になった。たくさんの蝶はたくさん魂かもしれない」

（男の子）「無意味だ！革命前の貧農の暮らしに比べれば、ブルジョワ的悲恋物語など全く無意味だ」

（女の子）「何言ってるのよ、どんなに世の中が良くなっても、悲恋物語は無くならないわ」

（男の子）「体制が変われば人の心も変わる」

（女の子）「なんですって、このわからずや！」

（仙人）「まあまあ、人間そのものが変わらない限り、世の中がいくら変わっても人の心は変わらない」

（男の子）「人の心は変わらない」

（仙人）「そうじゃ、同じことの繰り返しじゃ」

（男の子）「同じことの繰り返し？」

（仙人）「人間生命に宿る宿命を転換しない限り同じことの繰り返しじゃ」

― 暗転 ―

徐々に明るくなる。

下手よりエリート二人が登場。

逃避行のため顔も服も汚れている。

（男）「ここまで来ればもう大丈夫だ」

ふたり、泉を覗き込む。

（女）「まあ、とてもきれいな泉なこと」

女、水辺に降りて泉の水をすくう。

（女）「ねえ、見てみて、とても清らかで美しいわ。

（ひと飲みして）ああおいしい」

男、向こうを見こちらを見て追っ手を見張っている。

（女）「あなたも飲んでみて、とても冷たくて美味しいから」

（男）「ああ・・・」

男、水辺に下りていく。

水をすくいごとりと飲み込む。

（男）「ああ、とても美味しい。

水面が透き通っていて吸い込まれそうだ」

ふたり、目を見合わせて微笑む。

男、立て札に気付く。

（男）「何か書いてあるぞ？」

男、立て札を見つめる。

（男）「『飛び込むなかれ底なしの泉なり。

地下水脈にて死体は二度と上がらない』・・・

古い字だなこれは」

（女）「底なしの泉なの？」

(男)「ああ、底なしの泉だ」

遠くで民兵の声。

(民兵1)「足跡があるぞー！こっちだ」

男と女は泉の裏側に回る。

民兵3人が出てくる。

(民兵2)「こんな所に泉があるぞ」

(民兵3)「飲めそうか？」

(民兵2)「飲めそうだ」

民兵1は盛んに付近を捜している。
他のふたりは水を飲んでいる。

(民兵1)「あつ、見つけたぞ！」

民兵2、3急いで身構える。
にじり寄る三人の民兵。
後ずさりする男と女。

(男)「用意はいいか？」

(女)「もちろん！ほかに道はないわ！」

(男)「よし！それっ！」

ふたり、瞬時に泉に飛び込む。

(民兵3)「あつ、飛び込んだ！」

民兵2、飛び込もうとする。

(民兵1)「あ、まで！再び浮上してきた所を

掴まえばよいから、ここで待て。
必ず浮き上がってくる」

民兵三人、じつと武器を構えて待つ。
突然、おどろおどろしい雷の音。

―暗転―

稲妻が光り雷鳴が轟く。
民兵三人はひれ伏す。

大きな蝶が二匹、大きくゆつくりと
羽ばたいて泉から飛び出で
上手に消えていく。

その後を無数の蝶が天空を舞い
上手へと消えていく。

第四場 胡蝶泉（後書き）

つづく

第五場 明日に向かって！（前書き）

これは戯曲です。読みにくいでしょうがよろしくお願いします。

第五場 明日に向かって！

仙人と男の子女の子が中央に。

（男の子）「ほんとだ、同じことの繰り返しだ」

（女の子）「どうしても、あのふたりは
救えないのかしら？」

ふたりじつと仙人の方を見る。

（仙人）「救えないことはないさ。すぐく時間が

かかるかもしれないが、意外とそうでもないかもしれない」

（女の子）「どういうこと？」

（男の子）「可能性はあるんだ」

（仙人）「そうとも。可能性は十分にある。さっきも言いかけたが、人間そのものを良い方向へと変えていく運動を根気よく続けていくしかあるまいて」

（男の子）「なあんだ」

（女の子）「信じるのね！」

（仙人）「そうだ、信じるのだ。これからは蝶を見たらあの二人だと思い、必ずふたりが死なないでいい時代が来るように祈ることだ」

（二人）「祈ることだ！」

（仙人）「戦うことだ！」

（二人）「戦うことだ！」

（仙人）「この運動を広げることだ！」

（二人）「広げることだ！」

（仙人）「諦めずに持続することだ！」

（二人）「持続することだ！」

（仙人）「仲間を励まし、人間を革命する戦いを根気よく全世界で繰り広げることだ！」

（二人）「繰り広げることだ！」

（仙人）「そうすれば、人類の宿命の転換は必ずできる！」

（二人）「必ず達成できる！」

―暗転―

大きな蝶、無数の蝶が舞い続ける中を
若者と姫が上手から下手へ。

エリート二人が下手から上手へ。
稲妻が光り、雷鳴が轟き渡って、

――――――――――幕――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8394d/>

胡蝶泉

2010年10月16日02時21分発行